

5・目黒区観察地マップ



●緑被分布図について

使用した地図は、2003年10月に撮影した空中写真から、1m以上のみどりに覆われた部分(緑被)等を抽出し着色したものです。白いところは建物や道路、線路などです(平成16年度目黒区緑の実態調査報告書より)

凡例

樹木被覆地

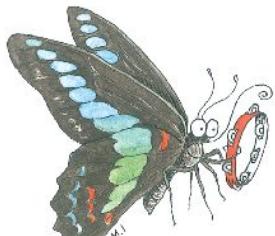
草地

屋上緑化

農地

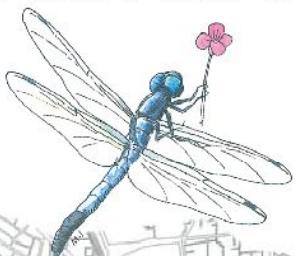
裸地

水面



主な緑地

- ①駒場公園
- ②駒場野公園
- ③東京大学教養学部
- ④目黒川緑道
- ⑤菅刈公園
- ⑥西郷山公園
- ⑦東山公園
- ⑧蛇崩川緑道
- ⑨目黒区総合庁舎・目黒十五庭(屋上緑化)
- ⑩祐天寺
- ⑪中日黒公園
- ⑫防衛省技術本部
- ⑬三田丘の上公園
- ⑭田道広場公園
- ⑮目黒区民センター公園
- ⑯不動公園
- ⑰日黒不動尊
- ⑯都立林試の森公園
- ⑯油面公園
- ⑳中央緑地公園
- ㉑清水池公園
- ㉒円融寺
- ㉓立会川緑道
- ㉔すずめのお宿緑地公園
- ㉕碑文谷八幡
- ㉖碑文谷公園
- ㉗中根公園
- ㉘東京工業大学
- ㉙呑川本流緑道
- ㉚国立病院東京医療センター
- ㉛呑川柿の木坂支流緑道
- ㉜都立駒沢オリンピック公園
- ㉝呑川駒沢支流緑道
- ㉞宮前公園
- ㉞めぐろ区民キャンパス公園
- ㉞金町公園
- ㉟八雲氷川神社
- ㉟熊野神社
- ㉟目黒川
- ㉟目黒川



500 0 500 1000m

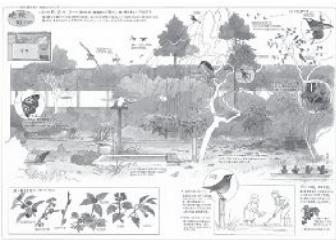
N



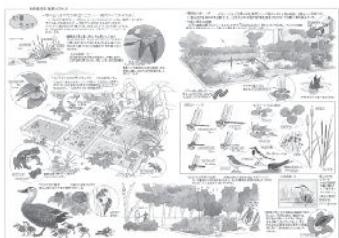
6・いきものたちが暮らす場所



目黒区の特徴的な7つのハビタット



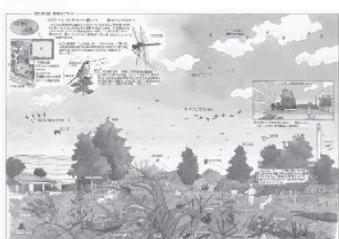
庭地(P.36~37)



小さな水辺(P.24~25)



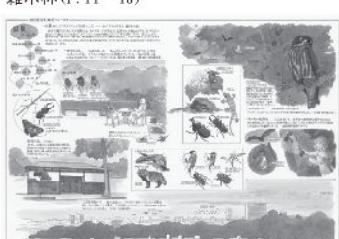
屋敷林(P.28~29)



草はら(P.32~33)



雑木林(P.44~45)



都市の森(P.28~29)



広がりのある水辺(P.40~41)

1. 庭地 * 小さくても多様ないきものが賑わうみどり

私たちがいきものたちと出会う一番身近な場所が庭です。小規模な面積でも、さまざまな樹木、花木や実のなる木などが植えられ、いろいろないきものたちが訪れます。花壇や菜園、草地、裸地といった変化に富んだ環境が見られ、季節の変化ばかりでなく、一日の内の日なたや日影、人のかかわり方などで絶えず変化をしています。隣り合ういくつもの庭がつながり合って、多様な生物の生息環境を作っている土地を『庭地』としました

2. 小さな水辺 * いきものたちのゆりかご・ピオトープ

庭地には小さな水溜りや、池があります。中には、手水鉢(ちょうずばち)や、置きっぱなしにした発泡スチロールの箱に水が溜まった「水辺」もあります。また最近では池とその周辺をいきものの生息場所にしようと、小学校ピオトープなどもつくられるようになりました。このような環境は、私たちがともすると気がつかないうちに貴重なトンボやヒキガエルなどが生まれ育つ場所になっています

3. 屋敷林 * 住宅地に「みどりの島」のように残る樹林

屋敷の周囲に防風や暑さを和らげるために植えられた樹林が屋敷林です。目黒区では、住宅地のところどころに、大きく育ったケヤキやシラカシ、竹林などの木々が茂る屋敷林が、こんもりとした「みどりの島」のように残されており、かつての武蔵野の風情を街に伝えています。このような樹林は、都市に住むいきものにとって、移動の中継点になるほか、巣作りや隠(ねぐら)、休息地などとして、なくてはならないみどりのオアシスになっています

4. 草はら * 原っぱ・草地・野の風景

野原や草地、畑など武蔵野の「野の風景」が広がる村落だった目黒区は、今では都市化し、野原や農地もほとんどなくなりました。大きな草はらはなくなりましたが、人に踏み固められることの少ない庭や空き地、学校のグラウンド周辺、公園の植え込み地の周囲などに、小さな草地が見られます。草は、性質も大きさもいろいろあり、草地は多様ないきものの生息環境となっています。最近では、建物の屋上緑化として、草地がつくられ、昆虫や鳥がやってくるようになりました

5. 雜木林 * 手入れによって伝えられる林

雑木林は、人の暮らしの中で育て利用してきた里山の人工林です。関東地方では、コナラやクヌギなどドングリのなる落葉広葉樹が植えられ、定期的な伐採、下草刈り、落ち葉搔きなどの作業が行われ、炭焼き材、薪づくりのほど木、畑の上作りに活用される落ち葉、山菜など、生活に必要な多くのものを得ることができます。駒場野公園には、東京教育大学農学部時代からの雑木林があり、ケルネル水田とともに地域のボランティアや学校活動の中で手入れされています

6. 都市の森 * 大きな樹林地・大木のある公園

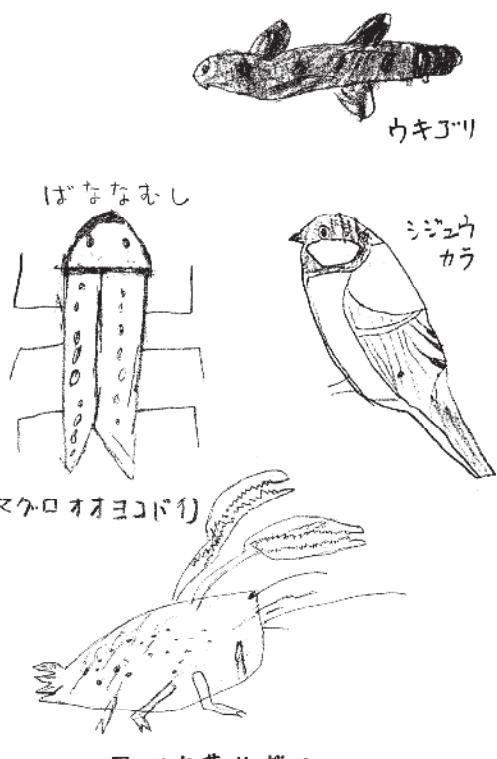
駒場公園などの大きな公園、東京大学や東京工業大学などの大学や研究所、目黒不動尊、碑文谷八幡などの寺社には、まとまりのある大きな樹林が残されています。長い年月をかけ、自然に遷移した樹林は、シイ、カシ類の常緑樹が大木、老木となってうっそうとした「森」となり、周辺市街地に暮らす野生動物たちのサンクチュアリとなり、固有の動植物の生息地となっています。これらの緑地は、目黒川北側の岸線に連なる大きな樹林とともに、目黒区の骨格となるみどりです

7. 広がりのある水辺 * 海とつながる川やかつての溜池

いきものたちの集う水辺の風景は都市の中では大変貴重になりました。目黒区では、蛇崩川、立会川など区内の川のほとんどがふたかけをされ、水が見える川は目黒川と春川の下流部だけです。いずれも、下水道の高度処理水が流されていますが、目黒川では、東京湾からボラやハゼなどの魚類が遡上し、冬期はカモやカモメなどの渡り鳥たちが飛来しています。立会川の上流部にあり、農業用に使われていた碑文谷池、清水池は地域の人に守られながら現在は公園となっています。碑文谷池ではテナガエビやヨシノボリなどの背からのいきものが見られています

●ハビタット いきものの個体や個体群がすんでいる場所。生息場所

7・観察カレンダー



●生物暦をつけましょう

生物暦は、生物季節ともいい、植物の開花や動物の行動などによって季節の移り変わりを知る目安のことです。タンポポやサクラの開花日、アブラゼミの初鳴日など、生活中で親しまれるいきものや、人の暮らしにかかわりの深い事象は、気象庁などでも観測が行われ、開花前線などとして発表されてきました。生物暦は環境の変化などを知り、地域の自然環境の保全や回復の資料を得ることや、子どもたちの学習や原体験の機会になります。この観察カレンダーは、目黒区での生物暦をつくるヒントになるようつくれられています。庭や公園、学校など身近な場所で、生物暦の観測をはじめてみましょう

●使い方と記入の仕方

《月の説明》

- ★月の別名→太陰暦の月の呼び名の例です
- ★日の出日入り→15日の東京の日の出と日の入り時間。年によってずれます
- ★太陽のいる星座→太陽が一年で動く道筋(黄道)上にある12の星座名
- ★二十四節気→むかしは月の運行にもとづく太陰暦(旧暦)を使っていましたので、暦の月日と季節変化がそろわない場合があり、農作業など季節に応じた作業をするのに不便でした。そのため、太陽の運行をもとに、1年を約15日ごとに24節に分け、その区切りとなる最初の日に、その時季の自然の現象をあてはめて作られた24の暦が二十四節気です。節気は立春から始まる次のものです。立春(りっしゅん)、雨水(うすい)、啓蟄(けいちつ)、春分(しゅんぶん)、清明(せいめい)、穀雨(こくう)、立夏(りっか)、小満(しょうまん)、芒種(ぼうしゅ)、夏至(げし)、小暑(しょうしょ)、大暑(たいしょ)、立秋(りっしゅう)、处暑(しょしょ)、白露(はくろ)、秋分(しゅうぶん)、寒露(かんろ)、霜降(そうこう)、立冬(りっとう)、小雪(しょうせつ)、大雪(たいせつ)、冬至(とうじ)、小寒(しょうかん)、大寒(だいかん)

《カレンダー》

- ★国民の祝日、二十四節気、日の出と日の入りは2010年のものです
- ★都市の生物暦は、気象庁生物季節観測(1971年~2000年までの平均値)です
- ★都市名のないものは目黒区の記録で、自然通信員の観察記録から抽出し、おおむねの日付でカレンダーにあてはめました。観察の参考にしましょう

順位	場所・町名番地・公園名など	年	観察した内容		
			種類の名前	数や量	スケッチ・特徴など
1	ナガミヒナゲシ咲きだす 甲府ツバメ初見	2010年	学大駅前で、ツバメが1羽さえずりながら飛ぶ(初見)		
2	駒場野公園雑木林にタチツボスミレ咲くころ				
3	東京ツバメ初見	2010年	目黒川船入場で「カルガモを見る」		
4	トカゲ類顔をだすころ 水戸ソメイヨシノ開花				
5	このころ清明 チューリップ満開のころ	2010年	碑文谷公園クヌギ咲く		
6	ケヤキ芽生えのころ 金沢ソメイヨシノ開花				
7					
8	碑文谷公園クヌギ咲くころ				
9	ドウダンツツジ咲くころ				
10	コゲラが枝をつついでドラミングをするころ				
11					
12	林試の森公園カントウタンボポの咲くころ				
13	すずめのお宿緑地公園孟宗竹のタケノコ出るころ				
14	中目黒公園キショウブ咲く ヨロイマイコシノ麗花				